



Fate/side side materiale 4



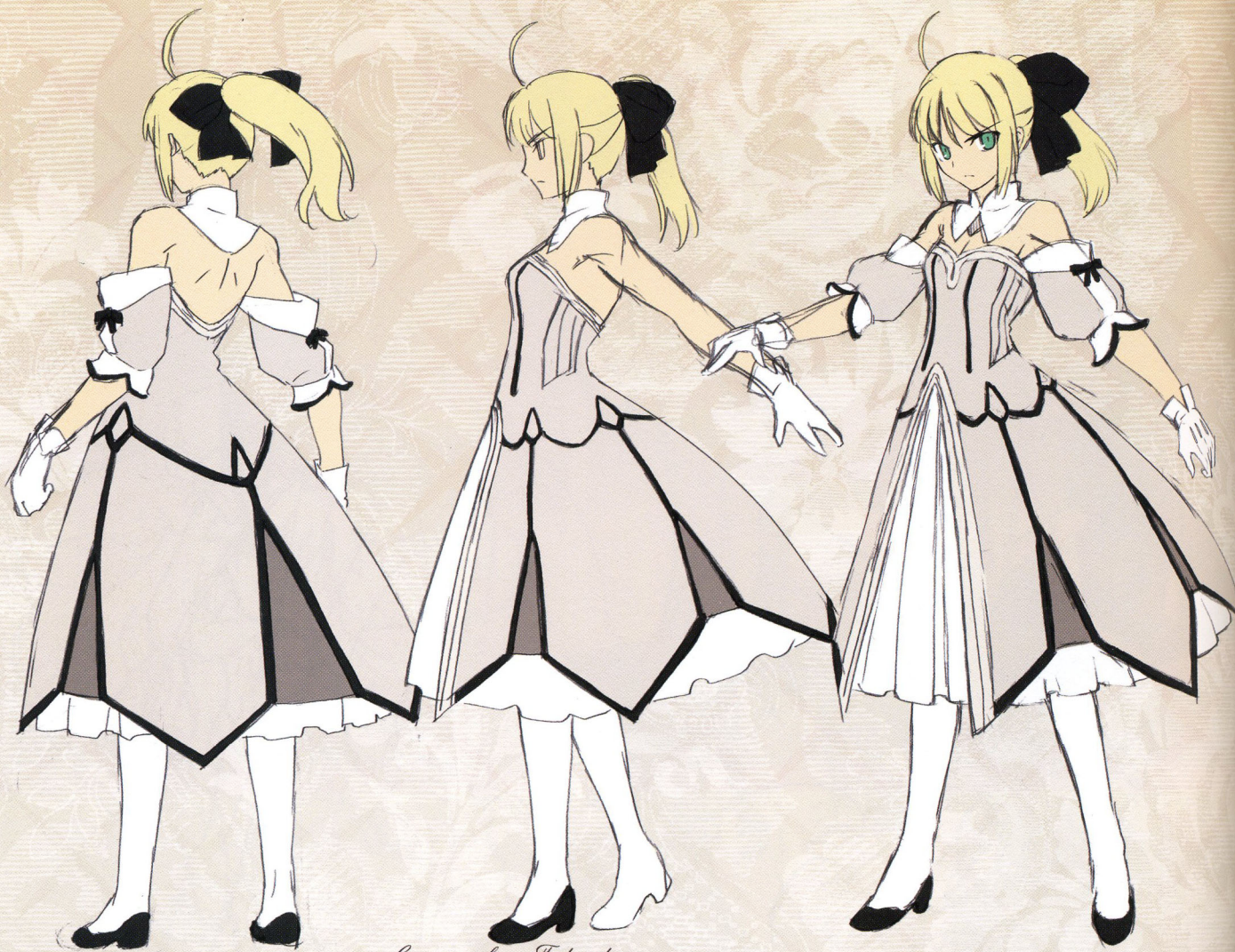
Comment from Takeuchi

セイバーリリィのデザインです。
セイバーのデザイン時に外した「女性らしいデザインライン」を入れる、というのがコンセプトでした。

Comment from Takeuchi

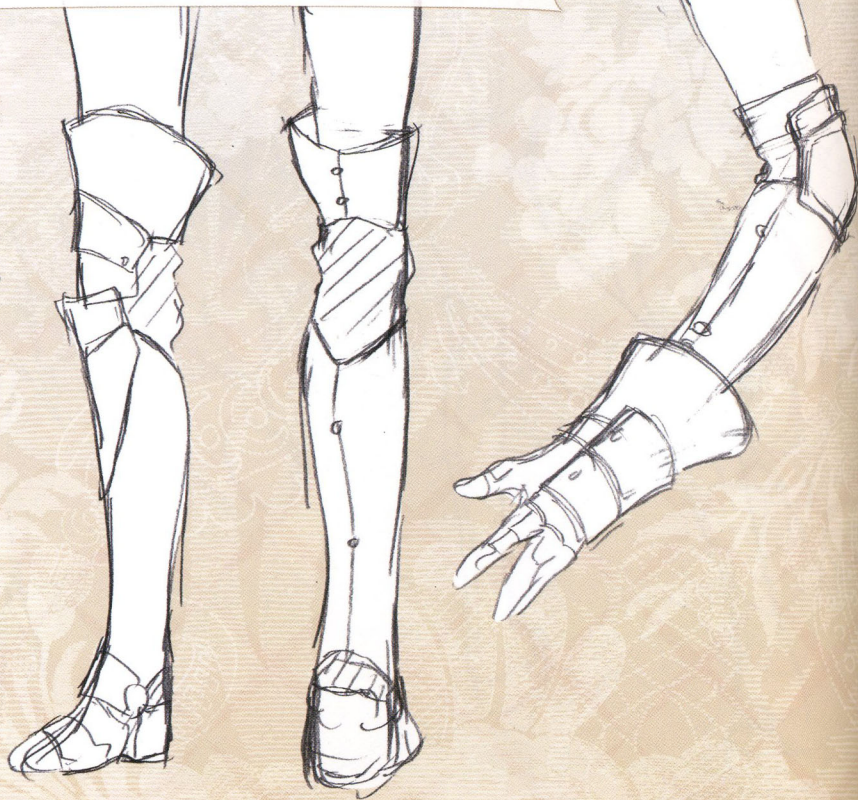
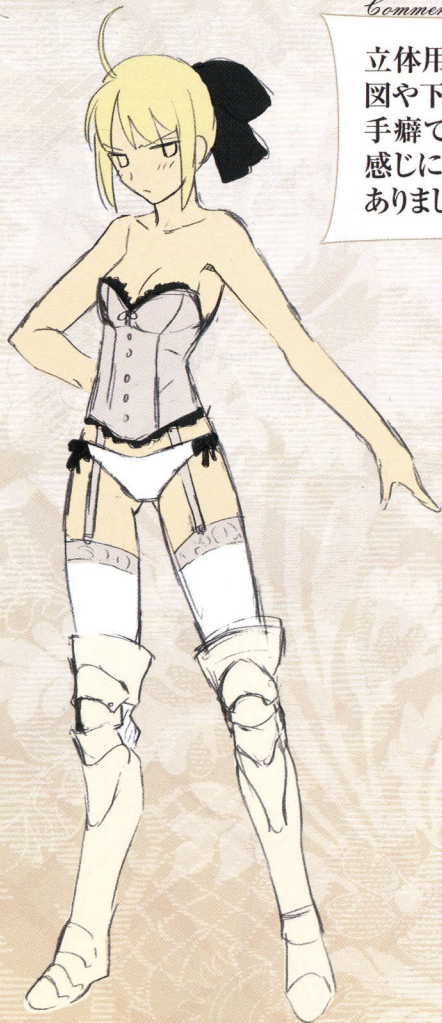
初めは少し迷走しましたが、
ステイナイトでキャスターに
着せられたドレスをベースに
することに決めてからは、す
んなりとまとまりました。

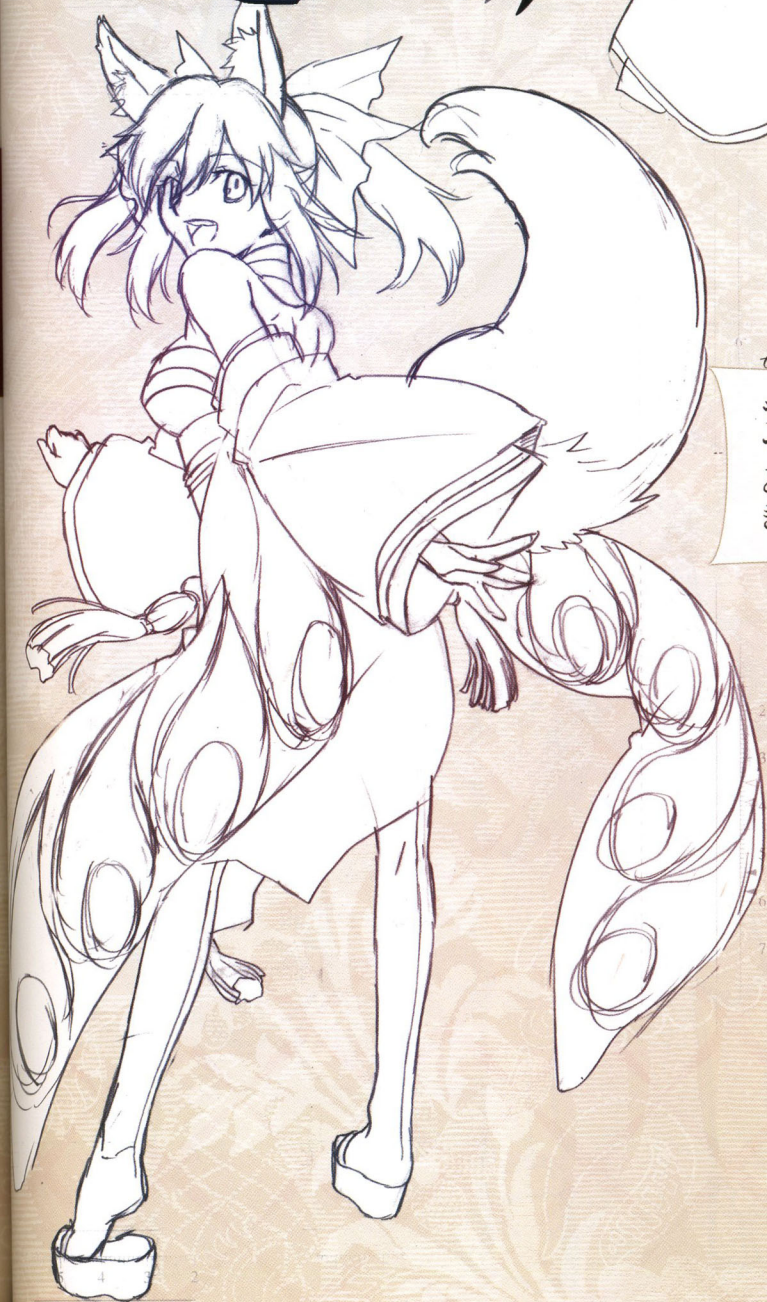
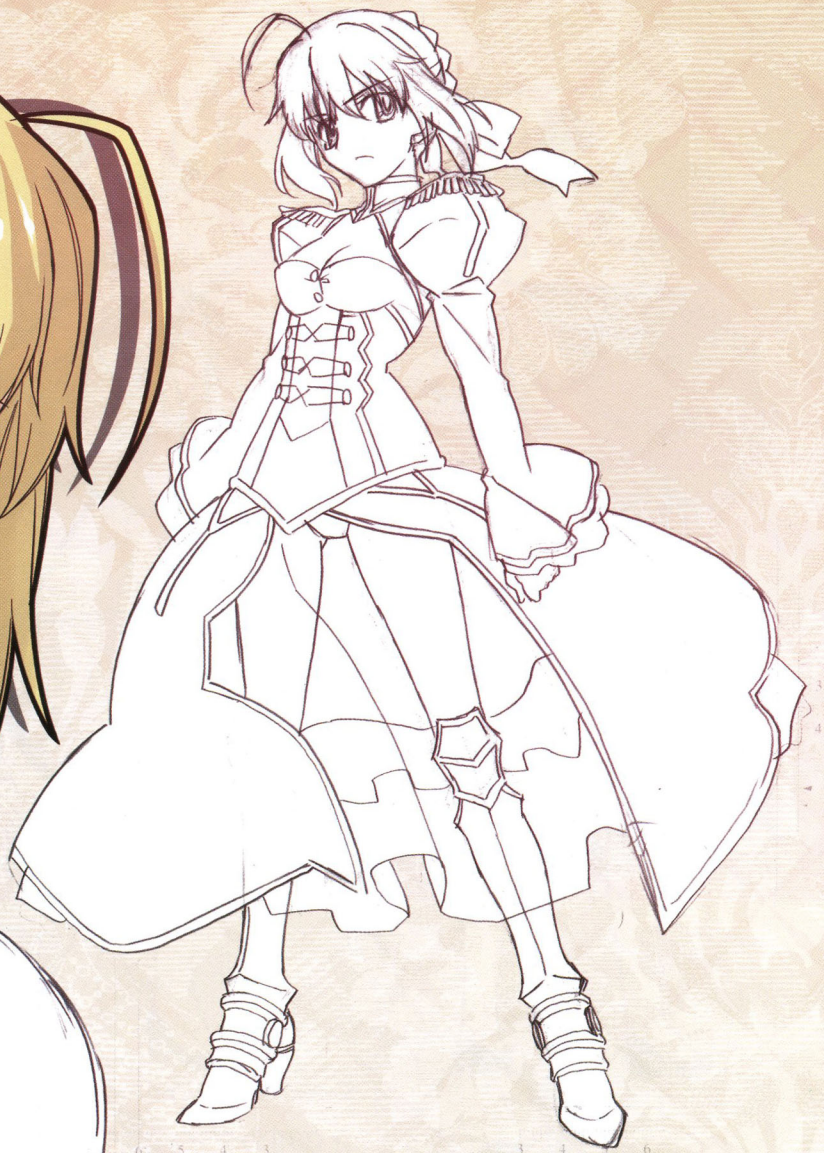




Comment from Takeuchi

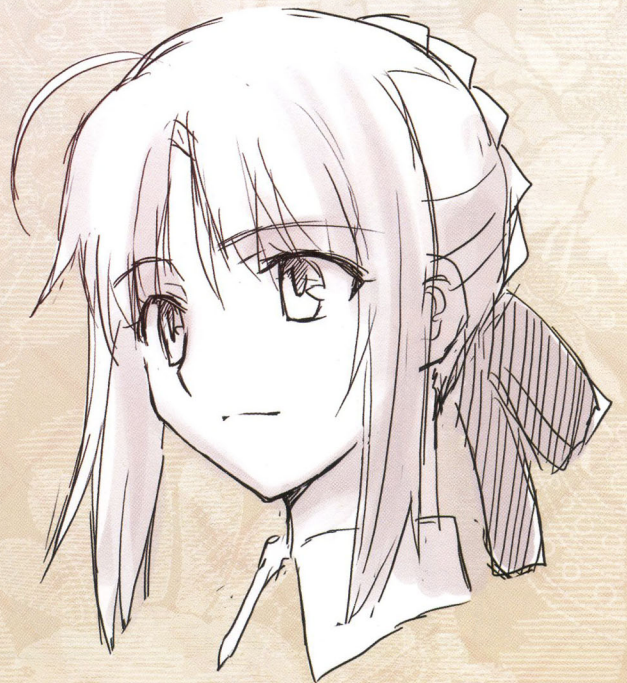
立体用のデザインだったので、珍しく初めから三面図や下着の設定まで描いてあります。手癖でグリグリ描いたのですが、素直に華やかな感じになってくれて、それなりに手応えと満足感がありました。

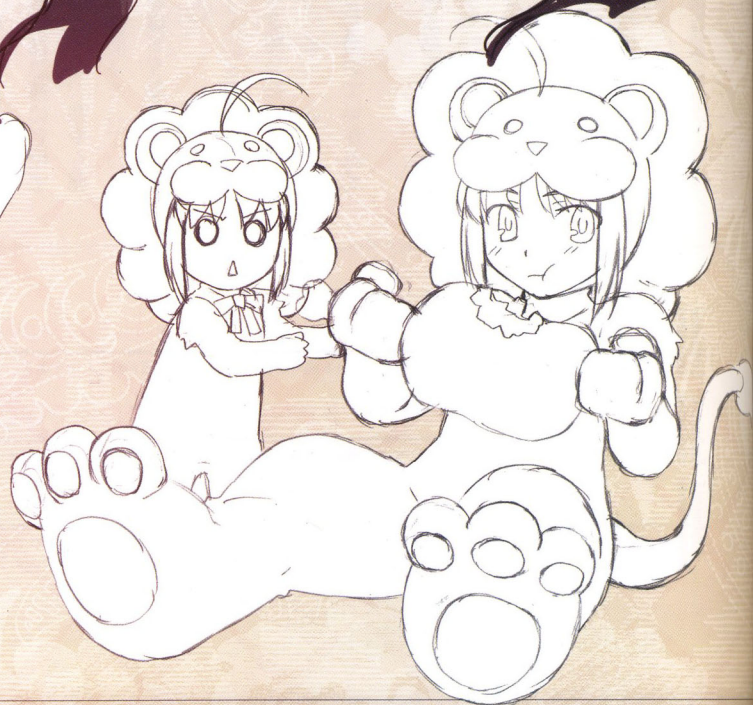
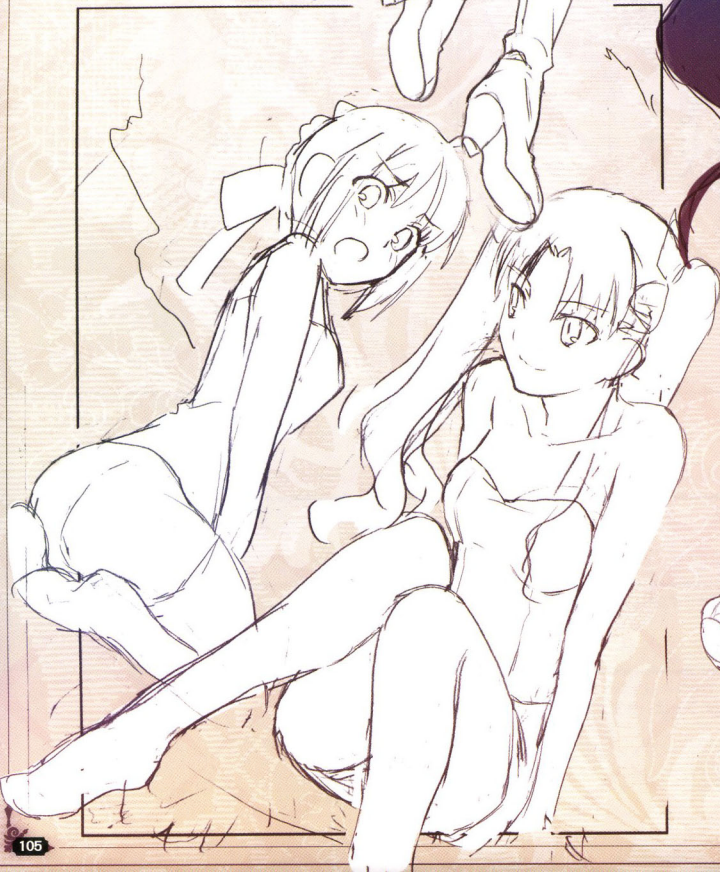
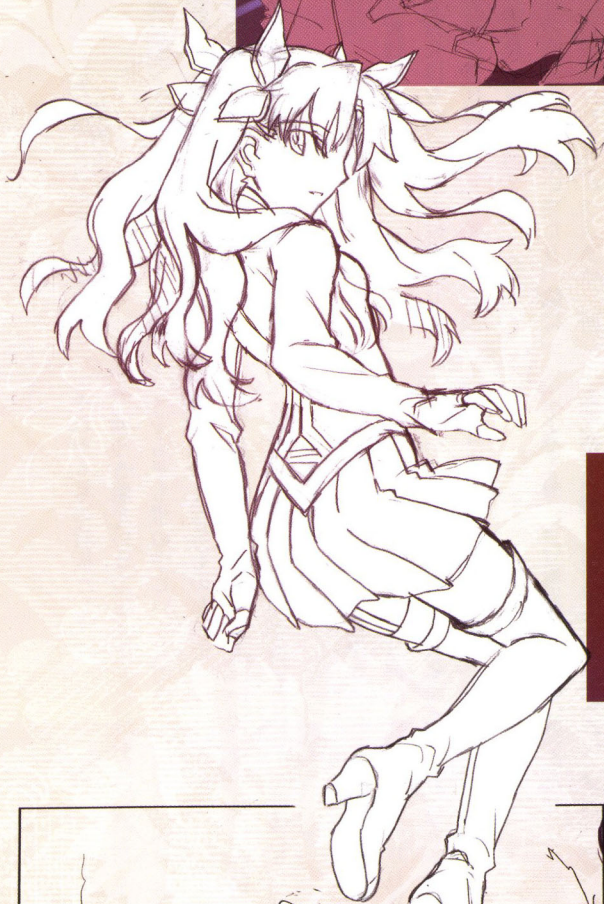
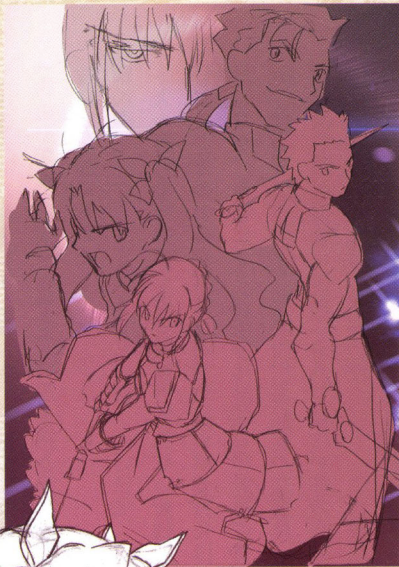




Comment from Takeuchi

ラクガキや版權の下書き、小カットなどを取り纏めてみました。画集という形で今までの作品をひとまとめにすると、改めて山のようにセイバーを描いてきたことを実感します。幸せなことです。





茸堂の復活

奈須きのこ

旅先から帰ると、玄関におかしな荷物が届いていた。

『約束の新案、ついに来る。白鶴を招きたるは是、この神妙な筐にて候。なにとぞ検められたし』

よく熟れた西瓜ほどの、得体の知れない荷物であった。はて、と首をかしげる。このような荷物を送りつけられる覚えはない。差出人は鍵屋なにかしだが、あいにく、我が家は錠前とは無縁のあばら屋である。こちらに引越してから十年、鍵屋の世話になった事は一度もない。

しばし頭を巡らせた後、ああ、これが件の器なのかと思ひ当たり、脇に抱えた。

入り戸に鍵はかかっている。そもそも我が家の鍵は内側にあるねじ式のものだ。基本、中に人がいないと鍵のかからない造りなのである。

現代日本では留守中に鍵をかけるが、もともと家屋とは開け放たれたもの。就寝時の戸締まりとして鍵をかけるのがせいぜいで、外から施錠する鍵など、人の住まぬ蔵や物置用のものだ。

我が家など金目のものがあるでもなし、一年二年程度の留守、鍵をかけるまでもなく近所の知人たちに任せておけばよい。

「む」
もつとも。立て付けの悪い戸はこの通り、力をこめてもガタガタと音をたてるだけで簡単には開かない。

「おや嘘つきの。帰ってきたのかい？」

ポロ戸と格闘する物音を聞きつけたのか、隣りの家から紙芝居屋がゆらりと顔を出した。

「ああ。寄り道ばかりして、目的地にたどり着く前に時間切れになったがね。DDDの三巻四巻とか、いい感じでほったらかしで帰ってきた」

「そりゃひどい。じゃあなにか、あれだけ偉そうにきつた啖呵は一つも守れてないのか。身を粉にして働くというのは嘘だったのか？」

「嘘じゃないが、まあ、嘘になったな。はははソーリーソーリー。でもまあ、

それがうちの看板だし」

嘘つき屋というのはまことに便利な屋号である。

そもそも世の中というものは、真実だけ口にしていたらギチギチになって回らなくなるものなのだ。

「開き直るな。2007年内に終わらせるって約束はどうした？」

「まさか。俺の中では、まだ2007年は終わっていない」

二年連続正月休みとか無かったしな。

気持ち的には2007年の秋あたりで私のDDD脳は停止している。まあいいじゃんか、そもそも作中では2005年の話なんだから、アレ。気長に待とうぜ、気長によ。

「でもまあ、つい最近ネジは巻いたんだぜ。しばらくすれば何か起きるだろうから、期待せず待っていてくれ」

力まかせにおんぼろ戸を開けて、埃の積もった店内に入る。

この店に戻ってくるのも二年ぶりだ。人の住まない建物は急速に老化するというが、もともと襦袢なので雨漏りしようが穴の開こうが、窓やら柵やらがなくなっていくのが、さして気にする事でもない。

「いや、数あるゲームハードの中からWiiだけなのはどうなんだ。狙いすましたように隴村正とノーモアヒーローズもねえし」

「ああ、それならプラモデル屋が借りていったぞ。

「僕はゲームソフトは即ぐには買わん。なぜなら、嘘つき屋に行けばたいていのソフトがあるからだ」とかなんとか

「——代わりにX・BOX360版デッドスペースとか置いていかれてもな。俺はWii版待ちだつーの」

「ああ、それと、洋ゲーがローカライズされないなら英会話を習えばいいじゃない！」とも言っていた

「ファック。今度来た時はメジャーでも渡しておけ」

まさにパーフェクトクローザー。*

プラモデル屋というのはいく数年で知り合った、むくつけき空手家のような物書きだ。

プラモデル屋を自称しているが、私から言わせればアレはテロ屋である。

茸堂の復活

2009.7. 携帯サイト「まほうつかいの箱」における隔月連載の準備号として書かれたものである。

しばらくすれば何か起きるだろうから、期待せず待っていてくれ

「宙の外」を脱稿した直後の話である。まさか雑誌に掲載されるのが翌年になるとは思ってもいなかったが。

パーフェクトクローザー

2008年クソゲーオブザイヤー据置部門大賞。

どのくらいヤバイゲームかはググってくれば分かる。ギャグとはやりすぎるとホラーになり、ホラーはいきすぎるとギャグになる事を証明する希有なソフト。

戦争、鉄火場が好きな男で、面白そうな匂いをかぎつけたら徒手空拳で殴りこむ。

東に痛快伝奇バイク、凌駕した。アニメがあればハーレーで駆けつけ、西に人気マンガの、広江さんにレヴィの女王様ルックを描かせる為にやった。ノベライズがあればニンジャスタイルで襲撃し、

南に魔法少女で凄惨なドラマを書いてほしいとの依頼あれば契約宇宙人を引き連れて降臨する。*

まことに恐ろしい男だが、本人はガンブラをこよなく愛するウルヴァリンのような輩なので憎むに憎めない。そろそろパッドエンド症候群が治ったと聞いたが、まあ、んなもんは一過性のもんだろう。今頃はアイゼンフリーゲルの下巻をどんなパッドエンドにするか舌なめずりをしながらMGグフを組み立てているに違いない。*

「……む」

居間に入ろうとしたところ、錠がかかっていたので通り過ぎる。ネジ式の鍵は内側から閉められぬ。耳を澄ませばカタカタと物音さえ。

「……。ところで、吾の留守中に変わった事は？」

「それが聞いてくれよ！ ほんの出来心だったんだが、セイバーをリリースしたらすげえ可愛くなって驚いた！ ただの思いつきだったんだが、何事もとりあえずやってみるもんだな！」*

「宗旨替えしたって噂は本当だったのか。貴様、メイドはもういいのか？」

「いいとも。いまライブで愛でるべきはワキだからね。メイドは重要文化財として大事に保管してくれば文句はない。……いや待て、ワキを見せるメイド服をデザインするのはどうだ……さしあたって月姫リメイクで翡翠の服を、こう、まことに言いくいのだが、ぶっちゃけノースリーブにするのは？」

「そんなメイドはフレンチでもブリティッシュでもねえ。まったく、たいの人間は歳をとるごとにキャラ萌え欲を薄れさせるといのに貴様ときたら」

呆れる反面、口元をゆるませながら縁側に腰を下ろした。

紙芝居屋との付き合いも長い。

大人としてどうかと思うが、相棒としてこれほど頼もしい男もいまい。

情欲を高尚なものとして分析すれば、即ち形而下の地獄に落ちるってなもんだ。ところで月姫にはすでにノースリーブ服のヒロインがいた気がしたが、はて。

「そういう君はどうなんだ。他に仕事でもこなしただか？」

「分かん。カタチになつたり没になつたりで、つまるところプラスだったのかマイナスだったのか、いまだに帳尻が合わないんだ。恥ずかしながら小説の方は進まなかったが」

「ふーん。じゃあ別件の仕事を受ける余裕はないわけだ」

「さて。ないと言うより、なくす為に戻ってきたと言うべきか。『ゲームは一日絶対一時間』なんて座右の銘も、そろそろ卒業だよ。幸い、もう年内にこれといったタイトルはないな」

「そっか。話は変わるんだが、マホヨ、月姫と並行して『ToHeart』みたいなゲームとか作らねえ？」

「……。ヒロインが全員X・MENの女の子版なら考える。生徒会長はマグニ子。あまりに強大な力の為、生徒会室は一面対磁力処理をされているとか萌える」

「そういう一発ネタじゃなくて恒久的なものを作りたいんだ。君な、発想がプラモデル屋のテロルに毒されているぜ」

「遠回しに断つたつもりなんだがね。なにしろ吾のスケジュールはむこう一年間、ぎっちり詰まっている」

聞こえはいいが、裏を返せばスケジュール調整に失敗しているだけの事。こんなものは売れっ子とは呼べぬし、商売先の皆様にも迷惑をかけているだけの話だ。とても褒められたものではない。

感慨にふけり、あるいは友人からの批難の目に耐えられず、ふと庭先に目を逸らす。

昨夜は雨でも降ったのか、庭の土には靴の跡があった。塀から私たちの立つ縁側まで、蛇身の如く続いている。鍵のかかった居間からはガタガタと物音が。

「……ところで、本当に留守中に変わった様子は？」

南に魔法少女で凄惨なドラマを書いてほしいとの依頼あれば契約宇宙人を引き連れて降臨する

Explanation 携帯サイト時より、一例を追加。

Explanation MGグフを組み立てているに違いない

Explanation GAGAGA文庫「アイゼンフリーゲル・下巻」発売前の事である。

Explanation ただの思いつきだったんだが、何事もとりあえずやってみるもんだな！

Explanation 2008.12.18日に発売されたFate格ゲーより。セイバーリリースはTMスタッフすら寝耳に水の話だった。

「しつこいな、そんなにうちの事情が気になるなら旅になぞ出なければいいだろうに。他に変わった事といえば……ああ、そうそう。Fateが銀幕シネマになるぞ。あとカナーンがアニメとかにもなった」

「ほんとアニメばっかりだなうちは。大丈夫なのか、ゲーム屋としての本懐を忘れてるんじゃないかな？」

「ハハハ。おまえが言うな」※

「ソーリーソーリー。魔法使いの夜だろ、分かっているとも、俺とて一日でも早く発表したい。その為に帰ってきたんだから。あ、それとカナーンの原作はうちじゃあないぞ。あれは新宿のとある名家からの預かり品だ。いざれ返さねばならん。まあ、リヤン・チーは俺の嫁だが」

曇天のごった日射しの中、色魔一步手前の病んだチャイナガールを思い浮かべながら、にこやかに荷物の包みをほどく。

風呂敷から現れたのは、木造りの箱だった。

表面には『罪科より集めて候』の毛筆体。

「なかなか胸踊る謳い文句じゃないか。その箱、何が入っているんだ？」

「完全に未定だよ。今のところ、何も入っちゃいやしない」

「今のところ？ じゃあその箱はモノを容れるためのものか？」

「逆だ。モノが出てくる箱と聞いた。中には機械仕掛けの筐が入っているという話だが——む？」

いかなカラクリか、膝の上に載せた箱が振動する。

震えはエンジンの回転に似て、獐猛な咆吼をあげる代わりに、

『仕事！ お仕事！ 新しい仕事ですよー！』

さあ、溜まりに溜まった利子をまとめて払っていただきますよう！』

キシヲのような声をあげるのだった。※

「うお、コイツ動くぞ!？」

「ああ、間違いない。使徒だ」

それぞれ年代がばれる反応を示しつつ、振動する箱を振ってみる。

ガンガン。箱の中では、何か小さなものがピンボールのように衝突している。

『ひどいいたいくらいこわい！ でもそんな暴力に屈しない！ 新世代のケータイたるもの、うっかり拳銃にうたれた時に跳ね返すぐらいじゃないとダメですから！』そして新しい仕事ですそのボンクラライター。そのありあまる伝奇電波を有料で世界に発信してください。できればゲーム形式で。選択肢のたびに課金する制度で、親元がポロ儲けっぽい構成とか、いいな』

声こそ違うものの、そのえげつない発想は割烹着の女中を連想させる。本当に大丈夫か、この企画。※

「……酷いな。ついに機械にまで命令されるようになったか。これが君の新しい仕事かい？」

「そのようだ。なんでもケータイ小説というのを連載してほしいとか」

「ケータイ小説だあ？ なにか、ゲーム狂いが原因で君が死ぬとか？」

こうして私は死んだ。

きのこ(笑)

みたいなの？」

「どうだろうなあ。そもそもアイデアがない。何を書いてもいい、と言われたが、なにぶんマルチタスクなど向かない性分だ。Dとマホヨが終わらないかぎり、自発的に書きたいモノなど浮かばん。つか、いいかげん雑務ばっかでこれ以上仕事増やしたくねえっつーの。俺もモンハンとかやってみたいっつーの」

しまった。ついに本音が出てしまった。

「なるほど、この箱は正しい。どうせゲームに潰すなら仕事をしろって話だな。だが本人にやる気がないのはいかんともしがたいぞ」

『ええ！ ですから、我々が！ 声なき多くの私たちが！ このボンクラが無駄に使う時間を少しばかり管理してやろうと言うのです！』

「いや、そうは言うが大佐。俺のゲームライフはともかくとして、たいていの書きたい要素はDDDとマホヨに注いでいるのは事実だぞ。もう一件、まったく別ジャンルのものに熱意を注いでいるが、それはあくまで設定作成だけだしな」※

『おお、この後におよんでまだ「選ぶ自由」があるというゆとり脳！ 貴方のような人間にはムチとネジが似合いです。しなるよううひっばりたい

おまえが言うな

2008～2009年、「劇場版・空の境界」上映。

キシヲのような声をあげるのだった

CV: 岸尾だいすけ。携帯サイト時はサダヲだったが、あまりにも分かりづらいのでご本人の名前を直に使わせていただく。

本当に大丈夫か、この企画

ダメだった。

まったく別ジャンルのものに熱意を注いでいるが、それはあくまで設定作成だけだしな

EXTRA だったり、Apocrypha だったり。

た後、うねるように穴をあけちやるけん！」

「雑誌になら穴を開ける気満々だが」

『こういう時だけ上手いコト言うし。もうこのボンクラライターは管理するしか道はねえ。貴方が書くジャンルなど、私たちが投票で決定します！』

「な」

「なんだってー！？」

風雲急を告げる超展開。

戦慄する我々の背後では、嚴重に施錠された居間の戸が、ガタリガタリと音をたてる。

「莫迦な。通るのか、そんな無法が——」

『通りますとも。これこそ携帯サイトならではのユーザー参加型企画ってものです！……まあ実際には、投票が終わってから二週間ぐらいいし製作時間はあげませんけど』

「えーと、奈須サンは、ゲームで忙しいでしょうから、ゲームに専念してください、と」

ピロリとアンケートを転送する。いや、目覚まし時計代わりにしか使っていないかったが、携帯電話を持っていて助かった。

『さっそく無効票がきました。死ぬ』

「なんでだ!? 嘘は言っていないだろう、嘘は！」

「諦める。ゲーム製作もする。本業も頑張る。そしてケータイ小説もやる。だがゲーム遊びはしない。全部やらなくちゃいけないのが幹部の辛いところだな」

『ええ。みんなが望んでいるのはそんな簡単なことなんです?』

『どうということなの……』

怪しげな箱を抱えたまま目眩を覚えるが、反面、どこか胸弾む昂ぶりがあるのも事実である。

私とて、面白い玩具をやるから来い、と言われて足を運んだのだ。

ケータイ小説という、自分にはおおよそ不利な状況でのライティングも悪くない。初体験のものは、それだけで心が躍る。

「でも、やっぱりどうということなの……」

そもそも記念すべき一回目がこんな手抜きで許されるのか。

ほのかな期待と茫漠とした不安を混ぜ合わさる。

もう2009年も後半にさしかかった初夏の事である。

つづく。

茸堂の復活／リバイブ

←

という事が、二年前にあったらしい。*

◆

「あー、楽しんで生きてえなあ」

「ついに狂ったの?」

「ああ、ごめんごめん。そういう意味じゃないんだ。誤解しないでくれ。」

——後先考えず、楽に売れるゲームとか作りてえなあ」

「どうか、狂ったの?」

GW初日。緑側にて茶など啜^{すす}っていたら、つい本音が転^まび出してしまった。隣りには紙芝居屋の姿。この特典本を作るにあたり、祝日なのに呼び出された我々であった。

説明するまでもない事だが、楽に作れるゲームと楽に売れるゲームは似ているようで違う。楽に作れるゲームとはスタッフが楽しく作れるゲームの意であり、楽に売れるゲームとはその通りのモノである。

「すまん、気が緩んだ。口にしただけだ。そんな商才があったら嘘つき屋などやっつけない。天気の良い祝日に男ふたりで職場にいる我が身不幸さ

Explanation ということ、二年前にあったらしい

見事にやり逃げである。

に、つい本音がぼろりと」

「君、僕だつてこんなホリデイは勘弁だ。いから続きを書いてくれ。そうすればお役目御免、さっさと家に帰れるぜ。ほら、携帯サイトで（二年前に）皆様から送られたリクエスト表を見ろよ」

あの無責任な発言から、携帯サイト「まほうつかいの箱」には多くのリクエストが送られた。その数、実に七百余件。みな私を信じ切った笑顔で、夢と希望に溢れた無理難題を投書してくれたのだ。

「きのこ×バビロニア」「きのこ×マクロ」「妹×妹」「妹×戦国武将」「妹×ガンム」「妹×核反応」「全宇宙×妹」。

くれぐれも断っておくと、私が狂ったのではなく、彼らの正気が疑わしいだけである。ともあれ、読者諸兄が何を期待していたかだけは痛いほど分かる統計であった。*

「しかし、中には『その過組み合わせがあったか！』と手を叩くものもあったんだぜ。まあ、内容的に全十巻でも終わりそうにないジャンルだったのが玉に瑕だが」

その信頼を私は裏切った。すまぬ。あと「無理しないでマホヨとDDDに専念してください」と送ってくれたユーザーの方の温かさには全菌糸が泣いた。五人ぐらいいいた。本当だよ。

「まあなんだ、今さら吾のようなロートルを引っ張り出す事もあるまい。まあ箱はひびちかが楽しく回しているんだし、こんな辛気くさい男の芸風は要らぬだろうさ」

さりげなく責任を放棄しつつ、着物の袖に忍ばせたPSPなどを取り出す。電源オン。ああ、アマガミぬくぬく麻雀は癒される。このところ知人ももモンハンばかり。そんなに狩猟生活に憧れていたのか。同じ繰り返しなら畑を耕しひたすら野菜を収穫しながら二次元嫁をゲットするルーンファクトリーの方が農耕民族たる我々向けではないのか、と愚痴の一つもでるといふもの。しかし、実際に触りもせず批難するのは物書きとして恥ずべき事であろう。3G発売の暁には今度こそデビューする、と心密かに闘志を燃やす私だった。

「結局、遊びに戻ってきたのか。この二年間いったい何をしていたんだ」

「何と云われると返答に困る。例えば紆余曲折、或いは五里霧中、然るに付和雷同のすえ元の木阿弥、茸の上にも三年と言うべきか——」

「なんだ。同じところをグルグル回っていたのか」

「……………」

身も蓋もない感想であるが、真実である。これだから旧知の連れは隅に置けぬ。それっぽい悩み顔でうなだれてもまるつきりスルーときた。

電脳麻雀にて綾辻さんに満貫を振り込んだ事もあり、私はそつとPSPの電源を切り、床に置く。



嗚呼、と嘆息して、私はこの二年間を回想した。

振り返れば小さな手応えと、些細な悔いばかり残る2009年、2010年だった。

職場に戻ってきた以上、様々な雑務が発生する。進行管理、外回り、打ち合わせ企画会議。創作脳は使わないまでも体力だけは削られていく。私などは嘘を吐くのが仕事なので、その手の職務は向いていない。面倒な事は紙芝居屋に押しつけてはいるものの、毎回欠席という筋が通らぬ故、不承不承と出かける毎日であった。

『日が落ちる頃 目当ての場所で歌った。思い描いていた感触とズレはじめる』*

などと、今でもマイフェイバリットな黒夢のNEEDLESSなどを口ずさむという体たらく。しかしそれらの外交が理想の物作りに必要不可欠なのも身に染みているし、新しいスタッフと話すのは楽しいものだ。似合わぬ役職ながらも、良い出会いを繰り返した。

そんな足場固めをしつつ、細かな仕事を片づけた。小説として初めての経験となるコラボ企画の短編二本、朗読企画ものを一本。ゲームにおいてはマホヨのオマケシナリオやらメルブラの追加シナリオやらドラマCDやらエクストラのシナリオやら設定やらその後の悪巧みやら。そのどれもが満足と納得のいくものだったが、終わってみれば俯

いている自分がいた。いつの間にか、持ち込まれた企画を片づけるだけの機械になってはいな

読者諸兄が何を期待していたかだけは痛いほど分かる統計であった

リクエストは「二つのものを掛け合わせる」というルールのもと集められた。

日が落ちる頃 目当ての場所で歌った。思い描いていた感触とズレはじめる

日が落ちる頃、というのはその通り夕方。ライブは午後六〜七時スタートが基本。目当ての場所とは赤坂ブリッツか武道館と思われる。

「いだろうか？」

「気が付かなければ良かったのに、と嘆く私と、

ようやく気が付いたか、と嘲る私。

どのような短編、スピンアウトであれ、読者諸兄が喜ぶ内容にしなければと躍起になったが、そもそも読者はその短編自体を望んでいないのではないか？ しかし新しい事に挑戦しなければ何かを失う気がして恐ろしい。ただ物を書くだけなら世の中には多くの才人がいる。自分ならではの『有用性』とは何なのかと問わなければ立ち行かないと焦燥に駆られて多くの仕事を受けてしまった二年間は、しかし。

「新しい挑戦など余分にして過分。貴方は貴方が得意とする物を作って下さいればよいのです——」

それは奢りであろう、と。

心の中の宗匠が敵かな目で私を見据えたのだった。

わりと核心をついた自己告発から恐慌状態に陥り、私は逃げだした。もう何もかもどうでもいいと、誰も知らない場所に逃避したのだ。

具体的に言うと、お台場にある大江戸温泉物語である。

片道三十分だった。*

「ふう——やはり日曜の夜九時以降の大江戸はいい。誰もいない。出店はほぼ閉まっているし、着物の姿のカップルもいない。サービス施設もほぼ全滅。このサイレントヒルな感じ、たまんねえ」

何の為に入場料二千円もするスパに来ているんだ、という指摘は止めていただきたい。たまには昼間にだって行くんだぞ。

とにかく、自分の体をいじめ抜けば精神の痛みは和らぐ筈だ——そんな、浅慮極まる心持ちでサウナに入る。中は濛々と熱気たちこめる木目の密室。しめしめ、狙い通り誰もおらぬと奥まで分け入ると、はたして、そこには降々とした体を赤銅色に染める、背丈にして二メートル長の羅漢がうずくまっていた。

「はい？」

「ちりん、と鈴の音が耳朶を打つ。

汗だくの男は薄目をぬるりと開き、長い息を吐いた。GEYAAAAA A。獣臭はいやまし、空気が微粒な剃刀に変貌した。呼吸する度に、ざり、と喉裂く錯覚に戦慄する。サウナの室温は三十四℃と明記されていたが誤字か脱字であろう、而して体感温度はその数倍まで跳ね上がっている。熱気はとろけた湯葉のように密室に充ち満ちる。またも汗だくの魔人と視線が合う。ORrrrrro。脳が擦過傷に腫むが如き男の魔息。ここは地獄か、コミケ四日目の同人屋か。もはや命運は尽きた。いよいよ最期の時と覚悟すると、男は手にしたユーカリの枝をパン、と自らの体に叩きつけ、

「生きるがよい。死ぬがよい。どっちなんだと問うがよい」

コヤマヒロカズの声で、面白い事を言うのである。

——怪僧であった。

CGへの拘りと超絶技巧が突き抜けすぎ、視界のきかないサウナではそのオーラから豪鬼と見間違ふほどの怪僧であった。*

「そういえば大江戸に向かうとき、「こやまさん、これから大江戸いくけど一緒にいきますか？」と声をかけていたな、と思い出す私であった。

「早いッスね。自分、外の甘味処であんみつ食べてから来たんですけど、脳目もふらずにサウナスか。さすがッス。ところで、生きると死ぬのどちらなのでしょうかね？」

「是非も無し。決めるのは我々に非ず。作品なり。度き出来なら死。甦し出来なら生。是に能わずはそれこそ余分な贅肉。いいからサウナで蒸としなさい」

「——むう」

つまり、心から満足のいくゲームを作ったのなら消えて良い。不満の残るゲームを作ったのなら、その打開の為に有り続けるということか。

生きていのならゲームを作れ、

心の中の宗匠

千利休。「へうげもの」ver.

片道三十分だった

大江戸温泉物語。大江戸の町並を再現した温泉スパリゾート。浴衣に着替えて大江戸の町（を模して出店）をざらりと流せるのが特徴。お台場という立地条件もあり、コミケ後には一日で同類とわかるフレンズたちが闊歩している。友よ、三日間の疲れを癒せ。

豪鬼と見間違ふほどの怪僧であった

豪鬼。CAPCON 様の有名格闘ゲーム、ストリートファイターシリーズより。こやま氏のこだわりはそれぐらい悪い。そろそろ背中を表記が「天」から「神」になりそう。

死にたいのならゲームを作れ。

禅問答一歩手前だが、なるほど、これ以上ない真理であり、実利ともなう制作姿勢である。モノを作り続けるのは、生を重ね続けるのは何の為か？云うまでもない。まだ自分は満足したりないという、その一点であろう。結局は自分の都合であるところに業深さを想うものの、情けは人の為ならず。己の利益が他人の利益になる社会こそ理想の社会、理想の娯楽業界というものだ。

この人もブレがない。あれこれ悩むのは作品を出してからの話にしるど達しているのだ。そのシンプルさに励まされ、胸をうがつつ不安を一時忘れ、檜の椅子に腰を下ろす。

縷々縷々縷々。愚かしくも愛らしい、わずか三十分の現実逃避はこうして終わった。

「——ところでマホヨのオマケシナリオについてなんスけど、追加素材頼んでいいッスカ。青子さんがお風呂でポロリとか、俺得なサービスシーン入りたいッス」

「萌えのある作品は良し。ない作品は悪し。プールもまた捨てがたし」

「そっかー、スク水かー」

お財布を握る紙芝居屋のいないところで、追加CGのアイデアを練る我々であった。この繰り返しでマホヨのCG総数がとんでもない事になるのだが、それはまた別の物語である。



「とまあ、なんて事があったんだ」

「ねえ、なんでいつまでたってもスケジュールとか制作費とか気にしないでゲーム作ってるの？ バカなの？」

ははは。そういうなソウルフレンド。今やっているR計画だって、既に予算オーバー気味ではあるまいか。*

「しかし、その話だと根本的な問題は解決していないんじゃないか？ 自分の芸風と腹を割って付き合っていくと、得心がいった訳ではあるまいか？」
そうなのだ。根本的な悩みは解決していない。この男の云う通り、いつ

までもグルグルと同じところで迷っている。今までの芸風を良しとする己と、良しとしない己とでウロボロス状態だ。

「面倒くさい男だな。じゃ俺から訊くがね。そんなに逃げたがっている Fate とは、君にとって何だったんだい？」

……さあ。どうだっただろう。Fate に対する総括は、四年前に済ませている。あの後、私の中で Fate は死んだ。多くを注ぎ込み、そして多くを与えてくれたアレは、そう——

「そうだな。一言で云うと、青春だった」

人生、情熱と労力のすべてを注ぎ込める機会が何度あるか。

高校時代、部活動などに専心しなかった私にとって、あれはまさに、そういうものだったのだろう。しかし。

「だった？」

「今は違う。家族のようなものだ」

Fate に登場するすべては、もう私にとって日常になってしまった。今もつとも活躍させたいキャラは赤セイバー。嫁として支えてほしいのはキャス狐。スピニアウトで活躍させたいのはガトーモンジである。彼らは自分が生きるかぎり、どうあってもこの茸堂に居座ってくれるらしい。

一方、そんな夢想しつつも、今はまったく違うものに人生をかけて取り組んでいる。作り手であるかぎり、青春は何度でも訪れるのだ。

紙芝居屋は我が意を射たりとばかりに口元をやつかせる。

「そら見ろ。その性根じゃあ、この先も家族は増え続けるぜ」

このように、したり顔でのたまわれた。凄まじいまでのドヤ顔である。

「でもまあ、その通りだ。結局は——」
年月を重ねれば重ねるほど余分な悩みは増していくという事か。ゲーム屋なんてみんなこんなものかと諦めて、縁側に両手をつく。

その時。スパン、という小気味のいい紙斬りの音と共に、居間の戸が真つ二つに切断された。

「!?」

驚いて振り向くと、そこには振り返った日本刀を腰に携えた、コンタオローのような凶手が一人。*

Explanation 今やっているR計画だって、既に予算オーバー気味ではあるまいか

2010年末から、私の主務はこちらとなる。「月の珊瑚」はそのリハビリ。

Explanation コンタオローのような凶手が一人

凶手。中国語で殺し屋、刺客を指す。この刃物のような男を指し示す言葉としては、深夜ポテチを食べたら翌朝体重が増えている事ぐらい、間違っていない。

「話は聞かせて貰った」

鍵の居間から現れたのは、見まごう事なくプラモデル屋である。

「おや、ブチさん。嘘つき屋の家でなにを？」

「うむ。今年のGWはそれなりに休めそうなのでな。ブキョウの慰めに、嘘つき屋の積みゲーを奪いに来申した」

その手にはPSPのダンガンロンパが大切そうに握られている。*

「これは駄賃よ。目当ての品がなかった故な。エルシヤダイはXBOXに入りっぱなしであった。拙者も、プレイ途中のものを借り受けるほど鬼ではない。——よいな、あと三日でクリアせよ」

「不法侵入……だと……？」

何でそうなるのか意味が分からないよ状態だが、この男はこれで、いざ品物が気に入れば数時間で私に返却し、喜び勇んでショップに買いに行く律儀者である。なので、留守中、かってに居間に侵入して内側から鍵をかけ、楽しく物色していた事に目くじらは立てまい。

それはそれとして、凄まじい切れ味だった。

徒手空拳、あるいは銃器使いだっこの男、またも得物を変えたらしい。

「分かるか。拙者、縁あって魔剣に開眼した」

「またかよ。なに、鬼哭街のリメイクですか？」

「四殺一生、まどか流と云ふ」

いや、それ魔剣じゃなくて。

しかも時事ネタかよ、と云いたくもあるが、アレはアニメ史に残るものだ。十年経っても風化はしない。この発言も、いつか懐かしいと振りかえる日が来よう。

「しかし、つまらぬ事で悩んでいたな。作品なぞそれ、いま断ち切った戸のようなもの。うまく切れる時もある、切れぬ時もある。登場人物をひとりしか殺せない時もある、勢いあまって全殺しにできた時もある。そのあたりは吾も意識していないので、あまり全滅作家などと云われても困る。我らが物語を使っているのではない。我らが物語に使われているのだからな」

「えーと、つまらぬ？」

「ふん。やりたい事をやるのが良からう」

きつい一言であった。

やりたい事とやるべき事が一致した時、あの日見た花咲くいろはの名前を僕たちはまだ知らない。*

そう、望みは果てない。大予算でコンシューマーゲームを作りたい。桜ルートアニメにしてみたい。五時間ぐらいで終わるワンアイデアものの推理ゲームを作ってみよう。一日中ごろごろしていたい。

しかしそれは、今やるべき事ではないとも解るのだ。ユーザーが求めるものは別にある。人間は歳を取る。自分などは八十歳になろうと永遠に十四歳でいる自信はあるが、お付き合いしてくれる読者の皆様はそうはいくまい。責任など気にしては立ち行かないのが創作業界だが、つまるところ、彼らを喜ばせる事も、私のやりたい事に含まれていた。

不純だ、不毛だとこぼしつつも、私を含め、できるだけ多くの人間が納得できる物作りをする——それがやりたい事なのだ、呆れながら認められない。

「アニメ業界も楽しいや。気が向いたのなら参るがよい。拙者が一から鍛えてさしあげよう。——人の、切り方というヤツを」

「いやあ。自分はどうも少し、こっちの方であがいてみるよ」

そうか、と旅立つプラモデル屋。悠々と去っていく背中を見送ると、紙芝居屋も鞆を手にして旅立とうとしていた。

「俺もちょっと徳島まで行ってくる。何かご所望の品はあるかい？」

「一番いいみゆきちのアナウンス録音をたのむ」*

かくして仕事場には自分だけが残り、このような日記紛いをしたためる羽目となった。

今年こそやりたい事とやるべき事が一致するようお願いしながら間に合わせ企画をやっつける、2011年ゴールデンウィークの事である。

その手にはPSPのダンガンロンパが大切そうに握られている

ダンガンロンパ。2011年、PSPで発売された監獄系青春学園エンターテインメントADV。露悪趣味を前面に押し出したスリリングなゲーム内容だが、根底に敷き詰められたのはこの時代と、ゲーム業界に向けての“希望、そのものである。2011年、徹夜してクリアした数少ないゲームの一つ。

あの日見た花咲くいろはの名前を僕たちはまだ知らない

いろいろ混ざっている。2011.五月の段階で断言できるほど、このシーズンのアニメは豊作揃い。「タイガー&バニー」「C」「アザゼルさん」もチェック。

一番いいみゆきちのアナウンス録音をたのむ

マチ★アソビ。ufotable社長・近藤光氏が率先して行っている、徳島を会場にしたアニメフェスティバル。2011.5.2～5は六回目。JR徳島駅を見下ろす観光地・眉山に続くロープウェイには、声優さんによるマチアソビ限定アナウンスが流される。今回は沢城みゆきさん。

長い、長い付き合いになりました。



蒼月タカオ



某月某日。幸せな空の上で。

星空めてお

三万フィート上空。華氏零下五十八度。
ベルト着用のサインが消える。
レストルームへ飛び込む。

成田のラウンジでしこたまビールを流し込んだので、まあ当然の成り行き。

日本のコメのビールは奇妙な味わいだつたが、ステイツやオージーのモミガラを煎じた上澄みのようなシロモノに比べればずっと酒らしかった。なんといつても、故郷ベルギー王国の真正銘のビールに再会できるのも、あと半日の辛抱だ。

座席に戻ると、通路向かいの乗客がくいているように自分のモニターを覗き込んでいた。

この機体のビジネスシートは、互いの顔が対面せずにリラックスできるよう設置されている。搭乗がギリギリだったので、相手の顔はまだ見ていない。ただ、座席下から覗くほっそりとした脚線は気になっていた。

「どうかしました？」

ぎくりと、女性は顔をあげた。

年齢は二十代前半、後半？ いや、十代かもしれない。東洋人はあいかかわらず年齢の推測がつかない。

黒髪が美しい女性だ。

「だ、大丈夫。なんともない、ので」

日本語なまりの英語。ここ数週間の出張で聞き慣れた。

「アテンダントを呼ばれるなら、シート脇のコールボタンですよ。ほら、その」

「えっ」

「えっ」

女性はぎよつとして腕をすくめる。まるで緊急脱出ボタンにでも触れてしまったかのように。

そのうちに機内食のワゴンが見えた。CAがにこやかにワインを振る舞っている。美女と近づきになる口実もここまでか。

一礼して席に戻った。

七カラットのルビー。

見事なマーカーズカット。

職業柄、つい彼女の胸元に目がいった。極大といつてもいい天然ルビーだ。ごく控えめなデザイン。勿論あれだけの石ならば小粒ダイヤの取り巻きなんかは不要だ。

ただとはいっても、ビジネスクラスに不慣れな客が身につけるような品物じゃあない。それこそ専用機を飛ばすようなピリオネアの持ち物だ。

この当代、貴石のカットは原石の形状から導出されるもので、ほとんど選択の余地は無い。

ところが逆にその品は、迷い込んだ光を捕らえて封じ込めるかのような、わずかに螺旋状にねじれたカットを施されていた。規格外の研磨は、石本来の持つ鳩の血の紅をより悩ましく深めている。

限定礼装——か。

そう。魔術師たちは躍起になって正体を隠したが、ある組み合わせに限ればそれは無意味だ。

たとえば人形遣いと、人形師。

森のヘクセと、緑の親指の園藝家。

そして寶石魔術師と、研磨職人。

……まあ、彼女が魔術師と決まったわけじゃない。庇護者から護符として贈与されたものだから、あるいは魔術的な奴隷の証だとか、色々ある。

しかしたとえ彼女自身が魔術師だとしても関係のないことだ。物騒な連中とは関わりの合いになりたくない。少なくとも、この空の上にいる間は。

ワインでいい気分だ。

シベリアの真ん中あたりで目ざめると、CAが緊張した面持ちで機首へ向かうところだった。

ミネラルウォーターを求める寝ぼけ声は届かなかつたらしい。仕方なくシートを立ててミニバーへ。

と、件の女性がまだモニターとにらめっこをしていた。

つい目が合うと、彼女はぼつが悪そうに尋ねてきた。

「……ごめん。これ、どうやって観るの？」

タッチ式のモニターには映画のプログラムが映っている。

『水着メイド大作戦』？

「じ、じゃなくて、もうそれは観たくないのいい加減。これ。こつちの」

「ああ、『アンセプション』。日本では確かまだ未公開だったな……そのパネルをタッチするだけだ」

「一足先に観てくるって人に自慢しちゃったのよ……ええと、こう？」

「いや、それはボリウムボタンで」

モニターではメイド風水着の金髪美人が、険しい雪山をスノーボードで滑走しながら、迷彩水着の追っ手がけてブルパップライフルを乱射している。

某月某日。
幸せな空の上で。

「そうこうしていると——」
不意に機内放送のスピーカーカーが、ポウンと鳴った。
『えー、こほん。乗客のみなさま、おやすみのところを申し訳ございません。当機機長からの伝言がございます』
伝言だって？

自動操縦中の機長が、何がそんなに忙しいんだ。

『お客様のなかに魔術師はいらっしゃいませんか？』

ぶつ、と女性は口元を押さえて窓を向いた。

これがハロウィン・ウィークで、かつ格安航空会社だったら許されたジョークかもしれない。ちよつと大手航空会社とは思えないフランクさだ。

窓を向いた女性はそのまま固まっている。

「なにか？」

「ジェット機って……トイレの排水をそのまま捨てるの？」

「いや、まさか。それは戦前くらいの話で——」

窓の後方にのぞく主翼から、白い糸のようなものが尾を引いて垂れている。たちまち凍りついてキラキラと美しい。

「……なるほど。スタッフに報告したほうがよさそうだ。ちよつと機長室に行つてみよう。めつたにない機会だし」

「わ、わたしも付き合うわ」

関わり合いにはなりたくないが、俺だって命は惜しい。

「なぜ貴女がここに」

「どちらかというそれは私の問いですが、そんなに似合いませんか？」

重苦しい空気のコクピットで出迎えたのは、見ているだけで背徳的な気分させられる小柄なCAだった。

我々の不審がる視線に、あらためて自分を見返している。制服から伸びる青白い手足は、痛々しい包帯で覆われている。

「知り合いかい？」

「たぶんね……えーと、追求したら負けな気がするけど、その格好は？」

「返り血に染まった修道衣のままているのも、不要な憶測を呼ぶかと思ひまして予備の制服をお借りしました」

「つて、普通の服だつてあるでしょ？」

「声からすると先ほどの機内放送もこの怪しいCAらしい。」

「……」

視線のさだまらない瞳で彼女が微笑む。

「今回は履いていますよ」

「何だつて？」

「いや、もういいから。何が起きているのか説明して」

肩をすくめてこちらの黒髪の女性がうながす。

「……私はもう下がるよ。機体のトラブルは報告した通りだ」

「あ、お待ちください」

なんらかの口止めを予想していた私は、続く言葉に少女意表をつかれた。

「ベルギー王立宝飾組合のケビン氏ですね？」

うなずく。

「期間契約の雇われだが」

貴重な表の仕事だ。俺としてはそつちを本業にしたいんだ。

黒髪の女性が、おや、とこちらを見た。

「貴方はこちらに残つて頂く方がよいでしょう。ミス・トオサカのサポートを依頼するかも」

「——トオサカ？」

くつ。

俺は顎髭をかきむしった。

「あの疫病神のトオサカか？ デ・ロード・デュヴェルの!？」

「な、なによ？ でゅべる？」

ひどい。俺が何をしたつていうんだ。

十字を切りながら愁傷様と唱えたCA、いや修道女は、名前をカレンと言った。

「さて、残量も少ないので、手短かに説明します——」

「そうだった。どうぞ続けて」

「この会話はボイスレコーダーから削除されます。ですな？」

さきほどからコクピットの一部分と化していた機長と副操縦士は、操り人形のようにうなずく。時折、無線で交信するほかは沈黙したままだ。

「そういう心配だったら、最初から問題ないけど」

魔術家系の若き当主が胸のルビーを指さす。

カレンは納得しうなずく。

「当機への脅迫メールがハバロフスク経由で伝えられたのが、離陸の九十分後です」

「ロシア上空か」

俺がワインに舌鼓を打ち、のんきに夢見ていたところだ。

「現在、着陸脚の片方が作動しません」

「Uターンして都市部の沿岸か、河川に着水すればいい」

「試みました」

エコノミー席、最尾部のレストルームに閉じこもった泥酔客が「神父を呼べ」とわめき散らしたのがその前後。

手を焼いたCAが修道衣の乗客に目を留め、助力を依頼。

「……」

男は扉越しに罪を告白し懺悔した。私怨のために、無関係な乗客を巻き込んで申し訳なかった。恨むなら暴虐非道な魔術師を恨むがいいと。

扉ロックを強制解錠して内部に踏み込むと、その男は爆発した。内側から何かにむさぼり喰われたかのように、ごっそりと腹部をえぐられて。レストルームはそのまま故障の名目で閉鎖された。

「まるで生け贄だ」

「はい。自分自身を供物とする、最古にして最強の呪術ですね。それと、どうやら私の体質が悪影響を及ぼしたようで、気の毒なことをしました」

体質？ カメラを取り出したその修道女は、液晶画面をトオサカに覗かせた。包帯には、新たな赤い染みが滲んでいる。

トオサカは白々しく首を振った。

「あいにくだけど、知らない顔ね」

俺は彼女は睨みつけていたらしい。気づいた彼女が唇をとがらせて抗議する。

「ちよ……買ったおぼえのない恨みまでは、責任取れないわよ？」

「だろ。雇われ研磨職人のバカンス二ヶ月と新婚旅行をぶっ潰して、眼鏡なんか造らせたのも覚えてないよな」

「メガネ？」

きょんとしているトオサカをよそにカレンは続けた。

「当初の航路設定を変更すると、なんらかの支障が生じるようです」

「主翼の燃料漏れもそれか……。電装系統に仕掛けが？」

「それほどに念入りで周到な畏なら、俺に手伝えることなんか何もないが——」

「いえ、どうやらこの機体は、失われた旧い巡礼路に組み入れられたようです。機体に憑いたのは、その守護者でしょう。一応ベルギーに向かっていますが、その先はどうなるのか……天国か地獄か。とりあえず、おだやかな着陸は望めそうにありません」

こちらのシスターもまた他人事のように言ってくれる。

「……あー、取り憑いたって？」

「貨物室の点検に向かったC Aが二名戻りません」

「あちゃあ、とトオサカが手で顔を覆う。

「初耳ね。異端扱いで断罪された守護聖人？」

「派閥闘争の犠牲者ですね。極寒のシベリアで生涯を終えるのはさぞ口惜しかったことでしょう。私がこの件に関わるのもそういった事情です」

「だいたい飲み込めた。悪霊取りが悪霊ってわけね。私を逆恨みした男は、その異端の聖人の遺恨を利用して復讐を目論み、限度を誤った」

腕組みして嘆息する姿は堂に入ったものだ。やり手の魔術師というのは疑いが無い。身に覚えが無い、というのもおそらく真実なんだろう。

「貨物室に憑依の媒介となる遺物があるはずだわ。私がそれを排除する。一筋縄ではいかなそうだけど」

「はい。それが第一の障害」

「え？」

「確かに燃料は残り少ないだろうが——」

「そうよ。悪霊退治が済んだら、すぐに近場の空港に着陸すればいいじゃない」

「航路上の各空港に交渉しましたが、拒否されてしまいました。撃墜するそうです。頼みの綱は今のところ、本来の目的地であるベルギー・ブリュッセル国際空港だけです」

「はあ？」

「地上当局側には炭疽菌テロという触れ込みで通達されているようです。これが第一」

「なっ、なによそれ」

「実際に犠牲者が出る。信憑性はある、か」

「ちらりと目に入ったカメラの画像が脳裏をかすめる。

「ああもう！ あったま来るわねえ！」

「そこで折り入って相談です、ミス・トオサカ」

「生まれたての雛を見つけた山猫みたいな目だわ」

「重量軽減の魔術を会得されていらっしやる」

「まあ初歩ね。でも機体丸ごとなんて無理よ」

「……なんらかの補助があれば？」

「乗客全員が魔術師見習いだとしても難しい。ここを一つに、恐竜なみの鉄の塊を時速五百マイルですつと飛ばすなんて。科学万歳よ」

「……」

今度はカレンが頬杖をついている。

そこへ顔に汗を浮かべたC Aが報告に現れた。客室にも徐々に不満が広がっているようだ。スタップが足りず、レストルームで起きた事件の詳しい説明も無い。妙な放送もあった。

不用意に墜落の可能性を知らされたら、パニックを招くかもしれない。そうなれば悪霊騒ぎよりマズい最悪の事態だ。

トオサカは操縦士から受け取った端末で、貨物室の見取り図と配置を確認している。

「そうだ。貨物室って、息はできるのよね」

「当然与圧はされてる。湿度と温度はだいぶ低めだろうが……それ、俺にも見せてくれ」

「え？ だめよ。ここからは一般人を立ち入らせるわけにはいかない。大丈夫、壁をぶちぬくような真似はしないから」

「どうだかな」

彼女は笑った。この若い魔術師は、本当に自信に満ちあふれている。仮に俺が彼女の立場で、乗客全員の命を背負って、たったひとりで敵に挑もうという時に、あんな

ふうに笑えるだろうか。

「……魔術の自動化は可能なのか？ さっきの重量軽減だが」

「え？ 詠唱をリピートすること？」

ほんのわずか彼女は黙考した。

「——短時間ならね。本来は詠唱も必要ないシングルアクションの術式だから

……つてなにペラペラ喋ってるんだろ。やつぱりちよつと緊張してるのかな」

「人の意志があれば、状態を継続させられる？」

追ってカレンが尋ねた。

こちらの真意を察したのか、表情が険しくなる。

「……無理よ？ 集団魔術の真似事？ 準備の時間も手段もないんだから。実行には

魔術の鍛錬と、正統な祭壇、それとこの場合は相当量の魔力が要るわ。専用に調整さ

れた限定礼装があれば、強引に実行可能かも……だけ……ど……」

俺は肌身離さず所持している研磨用工具をずらりと取り出してみせた。

「リユーターですか。強化ガラスも穿孔できますね。よく持ち込みましたね」

「生活がかかっているのね」と俺は肩をすくめる。

「い、いやいや、ちよつ——？」

狼狽するトオサカを見られただけで俺は満足した。ということにしよう。

「呪文はきみが唱えればいい、トオサカ。膨大な魔力の源はそこにある」

トオサカはさつと後ろを向いて胸の紅玉をかばった。

「これは私個人しか守護しないの！」

「その名辞は削りとる。新しいのを焼きつけてくれ」

「ダメだったら！」

がるる、とトオサカは唸る。祭壇の格式がインスタントすぎるのだ、これだけ疑

念雑念が濃い環境では絶対成功しないのだ、専門用語でまくしたてる。

それをまた慣れた様子でシスターが請け合う。

「そこから先は私がかましましょう。ミス・トオサカは、床下の脅威の排除に専

念していただければ結構です」

「全然結構じゃない！」

結局観念した彼女が、盗難用トラップを解除した宝石を渡々と手放した。

俺は早速それを専用の器具に固定する。曲面中心のカッティングならこの装備でい

ける。複数の技術者でかつ短時間で魔力を解放する加工というのは宝石魔術のコンセ

プトからすると真逆だろうが、理論は解る。

「悪いな。これできみは一段と危険に晒されるわけだが」

「大丈夫よ。そんな非常手段に頼るつもりは元よりないから」

それじゃ、と貨物室へ向かう直前、振り返ったトオサカはさばさばと告げた。

「思い出した。眼鏡のこと。魔眼殺し。親方は腕のいい若手に預けたって言った

けど。成る程ね、見事な仕事だった」

「それはそれは。国宝級のエメラルドを鑿^{ウツ}で二つに割って、最後は炉にくべて脱色だ。

工房の職人全員が泣いたね。あんな酷な仕事はあれきりにしてくれ。そうまでして、

魔術師を廃人にするような代物を造らされるのでは割りに合わない」

精一杯の苦言。

が、彼女はどこか誇らしげに目を細め、首を振った。

「そんな意図で発注したんじゃないから。あの眼鏡は災厄から世界を守護してるの

よ。それ以上詳しくは言えないけど、あれの持ち主を知ったら驚くでしょうね」

今度は俺が吹き出した。

「掛けるって？ あの拷問具を日常的に？ ははッ、それが本なら職人冥利に尽き

るさ」

機首の片隅に間借りした即席の工房から彼女が去った直後、死人も飛び起きそうな

音量で機内放送が流れはじめた。重厚なパイプオルガンの音色だ。

戦闘音をカモフラージュする意味もあるのだろうか、まあ半分は趣味だろう。格好

こそ妙だが、あちらの彼女が本物のシスターというのは偽りでは無いようだし。

今頃は客席前列に用意した祭壇で、祈りの言葉を唱えているはずだ。乗客多数の要

望で急遽とりおこなわれる、旅の安全を祈願する礼拝典^{マツリ}礼^{マツリ}だとか——

……そういえば、聖堂建築というのは空から見下ろすと、すべからく十字架の形を

しているもんだな。

「お客様、まもなく着陸態勢です。シートベルトのお手伝いをいたしましょうか」

「ああ……了解です。すっかり寝ていました」

その乗客は申し出を遠慮して、右腕一本でさつとベルトを締めた。

「初めてエコノミーシートというものを試してみました、意外に快適なものです

ね。なにより経済的です」

皮肉にとられてしまったろうか。ぎこちない笑みを浮かべて客室係は去っていつ

た。ふと見ると隣の乗客も、またその隣の客も、深く頭を垂れ、祈るように拳を震わ

せている。

統計上、旅客機は最も安全な乗り物であるという事実を知らないのだろう。もちろ

ん祈るのは個人の自由だ。

彼女——仮に乗客Bとしよう——は、眼下に迫る王都郊外の田園風景に目を遊ばせ

ながら、日本での激務を忘れ、一時の休暇へと想いを馳せた。

実は私…
今日はここに
面接に来たんです

ここが…
TYPE-I
MOON

Fate/saber world BLACK

豪胆な黒セイバー
可憐な白セイバー
絢爛な赤セイバー

そして
その中心となる
青セイバー…

私達の憧れ…
いつかあの人達の
ようになれたら…

ううん
ダメダメ!

こんな弱気だから
「地味セイバー」
なんて言われて
しまうんです!

目指すは頂点!
伝説の
セイバーに!!

オロロ...

ああああ!
私の一張羅
があああ!

バタン

申し訳ありません
お怪我は
ありませんか?

この車カーブ付近が
苦手でごめんなさい

ししし!
白セイバー
さんっ!!

あ…!
…いえっ!

こんなの全然
大したこと
ないです!

もしかして…
本日面接に
来た方ですか?

は!
…はい!

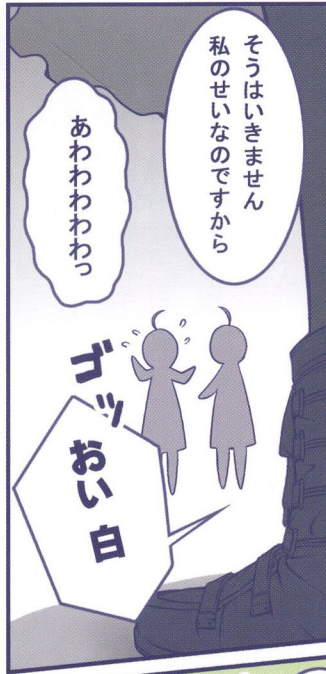
そうです…



新メニューが
出たのでな

あら
黒セイバーさん
また食べながら
通勤して

ひいひい！
黒セイバー
さんっっっ!!!



そうはいきません
私のせいなのでから

あわわわわわっ

ゴッ
おい白



でしたら
その格好は
いけませんね

代わりの服を
こちらで
ご用意させて
いただきます

いえ！ そんな！
白セイバーさんに
して頂くわけには！



す、凄いや眼力です。。。
動けません

殺されそうです



...



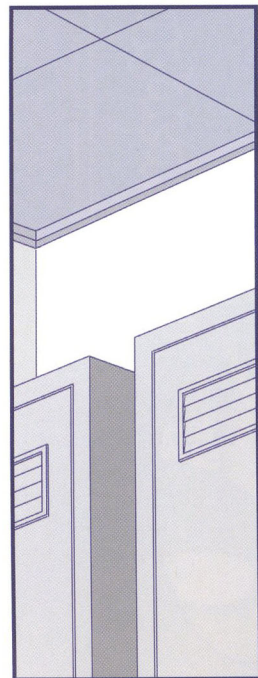
...ん
なんだコイツは？

本日我が社に
面接に来た方です



朝食でしたら
私のほうでご用意
いたしますのに

遠慮する
お前の用意する
飯は味が薄くて
食ってる気がせん



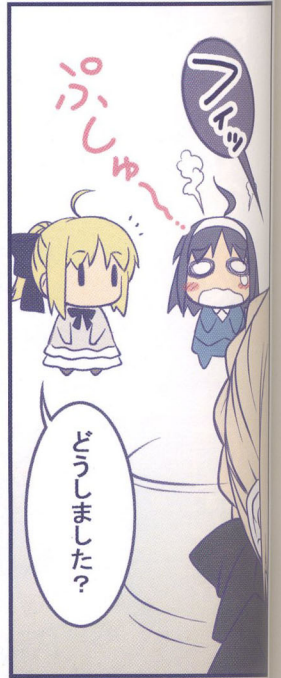
さ、そのままでは
お風邪を引いて
しまいますわ

わああああ
ああああ！



ああ見えて
やさしい方
なのですわよ

き...
緊張しま
した...
...



どうしました？

少し待って
くださいませね

あ…あの
本当に大丈夫
ですから…

わい がや
わい がや
おー!

おはようございます
今日は少し遅いんですね

白ではないか
おはよう!

赤セイバー
さんん!!

来る途中に面白い
モノがあったな!

ホラこれだ!

なんですの
これ? ?

またデスクの上に
置きっぱなしに
しないでくださいね

あー
わかっておる♪

むー
そなたは?

じつは
かくかく
しかじかで
…

そうか!
なら余の服を
貸してやろう!

うええ!

いえいえ!
そんな!

恐れ多いです!

遠慮するな
服なら沢山ある

どうだ!

まあ素敵

え

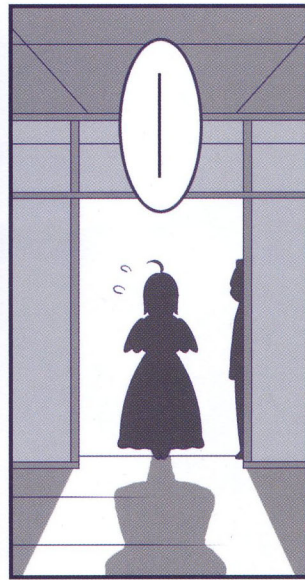
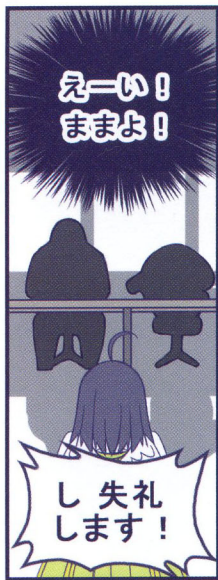
ドオオ!

あ…あの
これから面接があります
のでもうちょっと地味めで…

面接!

それならもう
パツチリではないか!

何が!?









はい、キャスターリリィですよ～。
無理とかしてませんから。全然余裕。

こやま@キャスター係









由紀香リリィ

由紀香リリィ、三枝由紀香は魔法少女である。彼女を生み出したにゃーにゃー団は、穂群原学園の制服をジャージで統一しようとする、すごいわるい子達である。由紀香リリィは人々の安眠の為、にゃーにゃー団をやっつけるのだ。

解説

花札の能力を引き出せるステッキに、札を装填して戦う。役を揃える事で様々な必殺技を発動。最強技は「五光」。





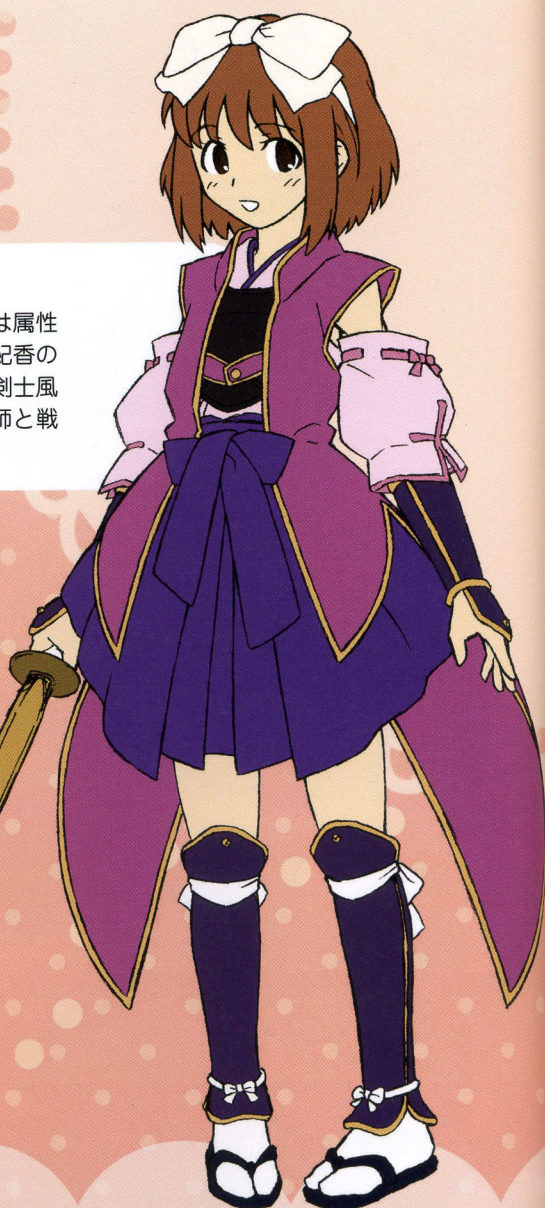
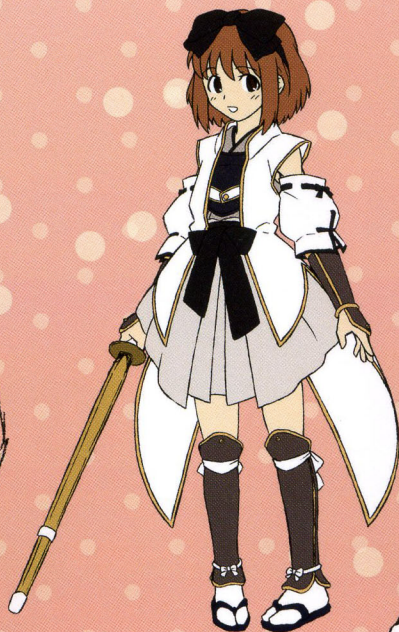
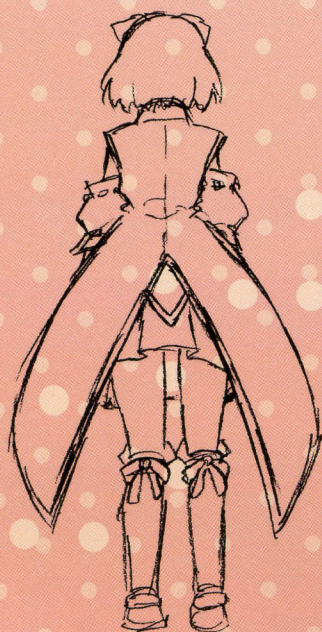
ボツ案その1

今回の本に参加する際に何を描くか迷っていたところ、武内さんから「架空の使用キャラとして三枝由紀香の話をして貰うもよし。」とのお言葉をいただき、吹っ切れました。そんなこんなで由紀香リリィを捏造する事に。でもこれはリリィ(=百合)というよりはチェリィ(=さくらんぼ)です。可愛さならこれが一番な気がしますが、これでは戦えないので下のボツ2に派生していきました。



ボツ案その2

以前こやまさんがキャスター・リリィのお話をされていて、「"リリィ"というのは属性的なもので、そのキャラに合った姿になる」と勝手に解釈していました。では由紀香の"リリィ"はどうなる?と考えた結果、「小次郎に力を借りるのではないか」と思い剣士風に。でもまだ弱いと思い、右ページの魔法少女に落ち着きました。英霊や魔術師と戦うには、魔法のひとつも使えないと!



ハイコラ



初めてのチームキャラ絵担当
でも Fateの名を冠した作品
ということで、とにかく精いっぱい
やらせて頂きました。
あらためて

皆様ありがとうございました!

ハイコラ

■Fate/extraで、原案、監修をやらせていただきました、新納一哉です。このような記念碑的な本に呼んでいただいて光栄です。もう時効だろうということで、開発中の謎画面を！

■エクストラ初報の画面は罪深かった…。製品版とちがすぎる。



実はどうしてもバトルの画面が間に合わないということで自分が徹夜ででっちあげました

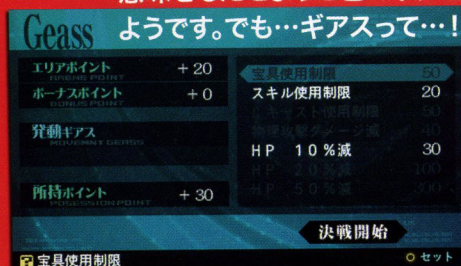
ドイツ語の関数名とかダメージ値が7[seven]とかガチで黒歴史です。

そういえば、セイバーの顔もだいぶ初期版。



■ギアス…ギアスって！スタッフが予選日に意味をもたせようと色々ネタを考えていた

ようです。でも…ギアスって…！



■初期メニュー“SEPHIRA”なんて成長システムがありました。内容はおぼえてない！



■あと営業用の資料には“アリーナハッキング”のシステム画面もありました。アリーナを作り替えるというすごいシステムでした。



■コマンド入力画面は沢山バージョンがありました。“じゃんけん”がわかりやすく、“遊びやすい”にするため担当デザイナーがすごい悩んでました、

■最後に。自分が見たいのは、いつかタイプムーンが作るだろう“究極のなにか”です。Fate/extraがその架け橋として、1つの実験作になったのであれば幸いです！





ワダアルコ

ILLUST ワダアルコ





ILLUST 津路参汰 (ニトロプラス)

虚淵玄

虚淵玄が犬いに語る

只今、アニメ版Fate/Zeroの脚本打ち合わせが大詰めで、まさに毎日がクライマックスな虚淵玄ですが。ここはちょっと変化球かましてFate/Apocryphaについて語ってみようかい！

不肖、この虚淵めはウラドとスパルタクスのキャラ設定を担当させていただいたのですが、とりわけネオ的に盛り上がったのはスパルタクスでありました。「朗らか抱擁系マゾヒズム」という何だかよく解らない境地を目指した結果、前代未聞のキモ怖可愛い人物像が育まれ、それはそれはもうアレなサンブル台詞の数々が産み落とされていったのであります。

中でも「大丈夫、ほら傷口も笑ってる」という一言がとりわけお気に入り、どんな声優さんがCVやってくださるのやら非常に楽しみにしていたのですが、結局、企画そのものがお蔵入りになってしまったことで、全ては妄想の地平の彼方へと去っていったのであります。

虐げられないと燃えない↓窮地に陥らないと反撃しない↓故に勝ち目のある戦略を受け付けない↓マスターの言うことを聞かない↓故にバーサーカー、という大変困ったサーヴァントとしてプレイヤーの皆さんを悪戦苦闘させる腹積もりだったのであります。でも専守防衛&不殺を旨とする善玉主人公ライクなマスターであれば、意外と相性良かったのかもしれない。

まあ、設定そのものはこうして開示されたことで、いつの日か僕らのキモカッコイイ奴隷剣士様が型月ワールドで縦横無尽に暴れ狂う姿を拜める期待も残ったわけです。

他のサーヴァントたちもそれぞれ一癖も二癖もありそうな素敵キャラばかりが揃っていたことで、どうかぜひ将来的に何らかの形で妄想が実を結ぶよう、今なお祈願しております。

SPARTACUS!!



草然徒括総本ア

Conversation about Fate/side side materiale complete

武内 本誌は「Fate/stay night」・「Fate/hollow ataraxia」・「Fate/Stay night Realta Nua」のオフ・シャル通販特典として作った冊子「Fate/side materiale」の1巻、通称「アレス本」の総集編です。ただ、再録だけでなく含まないので、描き下ろしの4巻を加えています。そもそもこの「アレス本」は、元々同人時代から特典として冊子を付けてきたので、商業作品でもスタッフの後書き本を作ってみよう、という発想で作られたものです。

須藤 「Fate/stay night」のマスターアプン・カ月前に、家に帰ったときの息抜き用として「ガチャフォース」を買ったんだけど、これがめちゃくちゃ面白かったんですよ。家にあったら会社に來くなるので、会社のゲーム置き場において、ハッパ作業が終わった後に会社にやっていた。その縁があって、ガチャフォースキャラクターデザインをされた日暮電一さんと、その後仕事をすることになった。惚れ込んでしまったゲームを「好きだ」と高らかに言うのはフランス人だよ。縁がでるから。

須藤 ゲームに関わったスタッフ全員の声を出したいというコンセプトの本。こういうスタッフを作ったんだよ、「こういうことがあったんだよ」という裏事情を載せた広報誌というか、小説ではない後書きみたいなものです。メーカー通販でゲームを買ってくれるタイプなファンだったら、この手の無言のうちに笑って許してくれるのではないかと、という緩い基準で作られています。

武内 そっぴいや奈須とくりさん、日暮さんからサイン色紙買ったな。

武内 売り物じゃないので気軽に、好き勝手にやっています。1冊目を作ったのは「Fate/stay night」のマスターアプン直後だよ。

須藤 うそでございませぬ。……え、話は変わりますが、この1の表紙を桜にしたのはゲームのバッケージにいなかったから？

武内 売物じゃないので気軽に、好き勝手にやっています。1冊目を作ったのは「Fate/stay night」のマスターアプン直後だよ。

武内 いや、バッケージにはいるだろ。ただショップ特典用イラストとして桜は1枚も依頼が来なくて……

須藤 スタッフ一同疲れきっているんだけど、最後はガッツでやるしかねえ強いモノが勝つのではない、面白いモノが勝つのだーみたいな、マシンヘッドさんのノリで……製作時間はとれくらいだったっけ。

武内 せめて生みの親である俺が救ってやろう、と……どちらにせよいい話じゃないか。表紙といえばIIの表紙のセイバーが、またものを食ってる件について。

武内 どれくらいだろう。Iの時はかなり突進したけれど、II以降は段々と時間が描けるようになってきたような。ゲームつくりと同じやねえ。

須藤 ど定番です。どノリノリで、どすすす描きましたよ。

須藤 そうっすね。耳痛コス。

武内 セイバーの食いしん坊属性はここまでネタにするつもりではなかったんだけど、人生どう転ぶかわからませぬね。それは置いておいて、IIは寄稿されている方も多くて一番豪華。

武内 そんなギリギリの状況が、名作「首無の墓標」を産み出したわけだ。

武内 色んな作家さんに参加してもらっているぶん、一番賑やかな紙面になっています。

須藤 うるさいシ。超苦しい粉れたシ。勘弁してほしいシ。一度日記読みたいものをやってみたらたけだシいや、でもチキン氣質がやるもんじゃありません。

武内 まあ、スタッフさんの作業自体はあんまり変わっていないけど。

武内 さて、アレス本の特徴と言えば、それぞれの巻に企画ページを入れてあることでしょうかね。スタッフがページ使った方がいいに書いていたけれど、よくある同人誌と同じになってしまうので、企画ページでそこしこの体裁を整えています。Iは年表、IIは用語辞典、IIIはキャラクタークロソレビュー。

武内 絵描き、文字書きには兎も角、その他のスタッフにやあちと辛い作業なのかもだけど、清兵衛は自分の担当ページを真面目に作ってるねえ。なんというか、文章からじみ出る人柄が、清兵衛のページの良さなだけとさ。

須藤 I以降はネタ出しが辛かった。IIとか昔因の笑過ぎる。主に進行の武内が深く考えていない為だと思われます。

武内 IIには「アマガミ」のキャラクターデザインをされた、高山真岸さんのイラストが載ってる。

武内 ストレスはクリエイティブの母なのよ？

武内 高山殿には、トゥルーラブの頃から目を付けておったのよ。出来ておるの。

須藤 こやつめ、ぬかしおる。ならアグリーは革命の父さすな、ははは。おめえ、次のアレス本ではメチャクチャな企画おしつけてやん。まあだと言いつつ、久しぶりに見直す経緯らしいですね。Iに掲載されている当時の年表を見ると、懐かしくてホロリとします。あのBLACKさんのシャイニングエクソダスは、当時「電撃姫」で中央東口さんが連載していた「シャイニングエクソダス」のバロタイです。懐かしい。

武内 花札面白いな。ああいつの、またやりたいっすね。

武内 注目すべきは、この初期森井しづみのイラスト。現存する森井作品の中でもわりと最古の部類だと個人的には推察しております。

武内 そっすね。次はトミノオンとかしてえっす。

須藤 TYPE・MOON年表のOKOSG君による「アルタイルでは明えない」とかマジな言いたいと思ふ。

武内 IIの企画ページ「用語辞典」は、由緒正しき「ファンロード」形式です。

武内 時代を感じるねえ。「ガチャフォース」にはまる。うそでたん明えとか、懐かしいぜ。

須藤 いまの若い子に「ファンロード」が分かるかどうか。ハッハハ。アマハとか、完全に意味不明だよな。

奈須 IIIはps版「Fate/stay night(Featia Nui)」の特典じゃ。

武内 自分の担当したページに「戦いすんで日は暮れて」って書いてあるだけだ、これは昔、奈須が小説の後書きのタイトルだとここで暴露する。

奈須 くわあああああ!? な、なんでそんな恥ずかしいこと言い出すのッ!? 黒歴史を発掘してもガントムにヒゲが生えるだけです!?

武内 いやあ、俺にとって、奈須作品と言えはこの後書きだったのだ。青春じゃん!?

奈須 つるさシ。まだ学生だったから、後書きを書きたい時期だったんだよ。もうその頃のきのこは死んだよ。

武内 ま、そんなわけでこのイラストには万感の思いが籠もっているわけよ。そもそも「Fate」をゲームにしたいと思った動機にまで遡るとだね。

奈須 いえ、そんな話は誰も聞いていませんのでスルー。それよりどうよ、この無駄に力の入ったクロスレビュー。

武内 誰かどのキャラが好きかっていうだけのネタを、こゝろ層にやっつくるだけですが、オール10のキャラはいないのね。

武内 ルビーちゃんがこの点数のは、まあ良いとして…なんで由紀香がクイン・殿堂入りしてるとしようか。

奈須 他のキャラが濃すぎる反動。万人に愛されるのは、何処にもいる普通の娘なんだよ。良い話だよ。さっちゃんも頑張ればなんとかなるよ。

武内 しかしIIIを作ったのが2007年だから、もう4年も前のことなのか……。

奈須 10年前くらいだと思っていました、まだ4年ですか……。

武内 まあでも、ゲームに付ける特典本としては、今のところ最後に作った本だったりするんですけどね。

奈須 そっすね☆ wwwここからしばらく自社ラインの作品が出ないという酷い事態に……

武内 笑えないわー。

奈須 そのその笑える感じになりますよ。で、今回のこの「Fate/stay night material」なんてものを作った理由は何なんでしょう。深い意味があったら教えてくださいよ。

武内 えっ、じゃ、別に、「complete material」の一冊目に付属していた巨大収納ボックスがあったんだけど、この幅が余ったから「じゃあアレ本の総集編を作ればいいじゃん?」みたいな?

奈須 完全によめえの設計ミスですねえ!?

武内 編集部の見通しが甘かったと言って欲しい。実は結構早い段階から、予定のシリーズの冊を作っても、ボックスに幅が余ることが分かっていたんだよね。それで「complete material」の4冊目を作ることにしたんですが、今度はその本が厚くなりすぎて、ボックスの余り部分に入らないとが言い出す始末。そこで初心に戻り、ボックスの残りの幅から入る本のページ数を算算。緻密な再計算の

結果、ボックスの隙間を埋めるため最適なものをこの、この総集編を作ることを思いついたというわけさ。Zenne

どうも どうも ない。

武内 しかも総集編だけではなく、IVという新作作というのが味噌。新作部分を頑張り過ぎて、またボックスに入らなくなっちゃったね。

奈須 ー、ミイラ取りがミイラって言葉、知ってる。

武内 この本は「Extra material」として「Fate」の派生物を取りまとめた本の初版特典なので、「アレ本」のIVも「Fate」の派生物全体を含めた後書き本というコンセプトになっています。その「日暮さんとか、ワタさんからも寄稿していただきました。その辺りを楽しんでもらいたいですが……」

奈須 それは純粋に嬉しい。ひとつの愚策が歴史を動かした瞬間である。

武内 それにしても、このIV。終わってみればリリア、辰への本になりました。こやまさんのキャストリイ計画は、極秘裏に進捗中と噂は聞いていたが……まさか既に完成していたとは……

奈須 日暮さんのページが好きすぎる。

武内 ほんと由紀香好きだよ、あの人。

奈須 由紀香好きだよ、あの人。

武内 日暮さんに原稿をお願いした時、直ぐに由紀香リリアを描きたらいいなとわかれたんだよね。ただ、デザインを進めていくうちに「そもそもリリアとはなんなのか」という命題に辿り着いてしまったよ。日暮さん曰く「リリア」という現象をほとんど分解していったら「II」にたどり着きました。

奈須 ……俺は日暮さんを甘く見ていた。どう分解したらあの結論に辿り着くのか……絵描きさんの頭中ってワンドーだわ……

武内 「単純にセイバー・リリアの格好をしていたらリリアなのか。いや、違う。そうじゃないはずだ。リリアとはもつと、自由、素敵、ふわふわしているものだ」というようなことを言っていました。

奈須 ああ。なるほど、そのキャラクターの一番、出し、部分を可愛く見せる。って「コ」か。

武内 お、流石端的に纏めましたな。で、あははリリア、言い張る。そこに出てきたのが白とピンクの2案、ならばピンクしかないというので、このデザイン。

奈須 うむ。これは模倣される前に映像化するしかない。

武内 ステッキに花札がついている所ね、ええ、スケジュールになっているんですよ。シジハバの原宿、単體で売ってそんな感じじゃないか。

奈須 それが由紀香クオリティ。「仮面ライダーオーズ」っぽく、ステッキ「一枚一枚花札を差し込んで戦うんです」。

武内 日暮さんも、ヒライさんも、すいぶん前の仕事ではあります、久じびりイラストを描いていたきました。これで「Fate」の派生物についても一段落だね。

奈須 とくるで新納さんのページの濃って、誰のイラスト。

武内 それ、自分で描いてる。

奈須 ちょっ、マシ、!

武内 元デザイナーらしいよ、あの人。

奈須 それで企画段階であれだけビジュアルイメージがあるのか……新納さんは斬新な企画を立てられるだけじゃなくて、ビジュアルイメージがハッキリしているのが凄いなと思っていただけど……そうかよ、絵心もあんなのかよ。その才能に嫉妬。

武内 BLACKさんの漫画はさあ、なんか聞いたりさあ、嬉しそうに続編の構想語ってます。

奈須 あの子、面接受かるんですか?

武内 彼女はまた、自分に備わった「青セイバー」としての「素質」を知らないとか……なんとか……

奈須 俺たちだって知らんかな(笑)！ もう連載してしまえ。

武内 まきの先生は、久しぶりに耳堂を書かれて如何でしたか?

奈須 いかか何とも。うか、今更だけど、そもそも「アレ本」自体が後書きだというのに、その後書き的なことを話るとか、超絶足以外の何物でもないのでは……

武内 ですか、完全にコンセプト間違えました☆まあそういう所も含めて「アレ本」としてのこと。

奈須 そっ……かな。で、そのその総括しますか。

武内 今回、今までの「アレ本」を読み直して感じたのは、「II」はTYPE・MOONが何処から来たのか、というのを表現する企画なのかも知れないと気づく。モノづくりの根幹にある衝動は、同人という場所から出て来たんだよ、という。これはもちろん「Fate」に限らず、これから先の作品でもやっていきたいと思っています。それぞれの作品ごとに形は変えるにしても、自分たちの来た道の証明みたいなものですね。

奈須 逆に「アレ本」みたいなものを出さなくなったら、TYPE・MOONは変わったと認識していいと思。より遊びがなくなると、企業として正しい姿勢になった。

武内 それとは別に、ちょっといいないなかで最善手を採る楽しみというのがモノづくりにあると思。今回、ボックスの隙間がなければ「アレ本」の4巻はなかった訳だからね。上手くないながら出現した本である、というところも含めて楽しんでほしいです。……それにしても、BLACKさんの漫画の続きは……どうしようかな。

奈須 「Extra material」を「ミック」のあなで買っと、特典ページに続きの「アレ本」の「Fate」を買って「アレ本」の4巻を買って「アレ本」の4巻を買って「アレ本」の4巻を買って……

武内 この男、商才の天才……しかし悪魔の所業……



